大分・別府ミステリー案内　歪んだ竹灯篭
導きの翡翠
風森章羽
HappyMeal

# 導きの翡翠（みちびきのかわせみ）

装幀　ハッピーミール株式会社
装画/挿絵　船越零司

# プロローグ

「ってことで、西沢さん。僕らはこれで。ありがとうございました！」
開明寺ケンはそう言って、椅子から腰を上げた。
「ケンくん？」
西沢は目を丸くして相手を見る。
別府市内にあるリゾートホテル、《セントアンナ》内にあるレストラン《フィラメンツ》。
西沢紘一が警視庁の刑事コンビと再会を果たして、まだ十五分と経っていなかった。
少なくとも西沢的にはまったく本題に入れていないし、「ってことで」と言われてもどういうことなのか、さっぱりわからない。
「なんですか、急に？　ちゃんと説明してもらえ――」
「これ、お返ししておきますね」
西沢の言葉を遮るようにして、鼻先に写真が突きつけられる。
昨日、西沢が地獄めぐりへ行った際に撮った写真だ。かまゆで地獄の青い色をした池を前に、笑顔の西沢自身が写っている。撮影者の腕も被写体も申し分ない、とても素晴らしい写真なのだが――

「西沢さんの言う通りでしたよ。さすが正義のルポライター。確かに『見てよかった！』ってなりました」

西沢の意図しない形で、どうやらその写真は刑事たちに重要な発見をもたらしたらしい。しかしそうして感謝して褒められたところで、意味のわからない西沢は完全に置き去りだ。

「おい、ケンくん。ちょっと待ってください。一体どうしたんですか？」

せめて説明ぐらいしてもらいたいのだが、「では、僕たちはこれで」とケンはまったく聞く耳を持たない。「センパイ、行きましょう」と相方を促すと、まさしく文字通りにケンはレストランを飛び出していった。

「ご協力ありがとうございました」

一方のセンパイ刑事のほうは落ち着いていたものの、「それではまた」と軽く頭を下げて、こちらもやっぱり説明もなく立ち去ってしまう。

「ちょっと、待ってくださいよ！」

西沢の声は、むなしくレストラン内に響いた。

彼らは西沢に聞きたいことだけ聞いて去っていった。ご協力も何もない。

「ああ、もう。これだから国家権力は……」

ぼやきながら西沢は、ケンから返された写真に目を落とす。

「せめて、誰と地獄めぐりに行ったんですか、ぐらい訊くもんでしょう。そうしたら……」

「そうしたら？」
『正義のルポライター・西沢紘一の事件簿』を語って聞かせたのに」
「それはケンさんたちも、聞かなくて正解だったかもね」
はっと顔を上げると、目の前に若い女性が立っていた。長い黒髪を耳にかけ、少し目尻の上がった猫のような印象の瞳に、いたずらっぽい光を湛えている。
若い女性に親しげに声をかけられて、普通なら鼻の下を伸ばすところかもしれないが、西沢はそうはならなかった。ストイックだから、と言いたいところだがそうではない。
「お父さんの長い話に付き合ってたら、日が暮れちゃうわよ」
彼女は、自分の娘だったからだ。といっても、はたから見れば恐らく娘には思われないだろう。娘のカナの顔は見事に母親似で、自分の遺伝子はどこへいったのだろうと西沢も首を傾げるくらいだ。以前、カナと二人で写った写真を知人に見せたら『美女となまはげ』などという、大変に失敬なタイトルをつけられたことがある。
「大体、『事件簿』って。今時ちょっと古臭いし、大げさじゃない？」
「じゃあ、どんなタイトルが今時なんだ」
そうねえ、と考えるふうにしてカナは向かいの椅子に腰を下ろす。
「……っていうか、その様子だとお父さん、私が大分（おおいた）に来てるってこともケンさんたちに伝えられなかったんでしょう」

「ゆとりがないんだよ、ケンくんたちは。短気は損気って言葉を知らないんだな」
「お父さんが妙な演出にこだわって、変にもったいぶるのがいけないんだと思う」
確かに、「カナちゃん元気ですか？」とケンに訊かれた時に「実は」と話すチャンスはあった。が、しかし。それではあまりにもあっさりとして、味気ないではないか。
「妙な演出とはなんだ。こっちは完璧な流れを考えていたのに。まず私がケンくんたちと感動の再会を果たし、その後にあの写真を見せて、実は地獄めぐりへ一緒に行ったのは―と話したところで、タイミングよくお前が登場するんだ。で、『ええっ、カナさんも大分に来てたんですか！』とケンくんが驚いて椅子から引っくり返ったところで、感動の再会・第二幕の始まりというわけだ」
「はいはい」と呆れ顔で肩をすくめるカナ。自分の考える演出はいつだって完璧だと西沢は思うのに。娘には理解してもらえず、「めんどくさい」などと言われる始末である。『見せ方』というのは非常に重要なのだ。カナとて、マスメディアの世界に片足を突っ込んでいる身なのだから、もう少し理解をしてもらいたい。
スイートルームの前で偶然を装ってケンとぶつかった演出は、我ながら実に見事だったと思う。あのさりげない演技。コートの裾をひるがえして立ち去る自分の姿を、きっとケンは惚れ惚れと見送ったはずだ。
「ケンさんたちも忙しいんだし、仕方ないわよ。落ち着いたらまた会えるわ」

「それにしたってせっかくの再会なんだから、もう少し……」
「まあいいじゃないの。細かいことは」
カナは腰を上げて、ぽんと西沢の肩を叩いた。西沢からすれば、まったくもって「細かいこと」などではないのだが。
「それより食事をしましょうよ。ここはレストランなんだし。お腹すいちゃった」
この店はビュッフェスタイルになっていて、バラエティ豊かな料理たちがずらりと並んでいるのが西沢たちのいるテーブルからもよく見えた。いそいそと料理を取りに向かうカナの背中を眺めながら、やれやれと西沢はため息をつく。
そして心の中で、ケンたちに語れなかった『正義のルポライター・西沢紘一の事件簿』のページをそっと開いた。

# 1

西沢が大分へ赴くことになったのは、娘のカナの誘いを受けたからだった。

「今度、うちで大分の特集をすることになったの。それで向こうに取材へ行くんだけど。よかったらお父さんも付き合わない？」

カナはフォトグラファーを目指して勉強するかたわら、ウェブマガジンの編集のアルバイトをしていた。それが思いのほか性に合っていたようで、現在は副編集長を任されるまでになっている。本人も楽しいらしく、最近はそちらの仕事にかなり熱心に取り組んでいるようだ。

カナが自らの取材旅行に知人を誘うことは、珍しいことではなかった。ルームシェアをしている親友の珠海（たまみ）は何度か同行したことがあるようだし、事件をきっかけに知り合ったケンたちが誘われたこともあるらしい。

けれど西沢に声をかけられることは、今までに一度もなかった。

それも当然だろうと、西沢は思っていた。いい年をした娘が父親なんて誘うわけがないし、まして自分たちは仲良し親子とはお世辞にもいえない。それどころか、長いこと疎遠になっていた間柄なのだから。

一体、どんな風の吹き回しだろうか。疑念が先に立ったが、やはり嬉しくはあったので、気恥ずかしさを抱えつつ西沢は娘の誘いを受けた。もとより西沢も、大分へ行くことを考えてはいたのだ。

大分ではこの十月、『テクミックス』というイベントが開催されることになっている。巷で人気を博しているデジタルアート集団『アルテヌーブ』が、別府の伝統工芸である竹細工とコラボしておこなわれるアート展ということで、発表当初からかなりの注目が集まっていた。カナのところで大分の特集をすることになったのも、テクミックスの開催を控えてのことに違いない。

西沢もまた、テクミックスには大きな関心を寄せていた。イベントの内容もさることながら、その状況に興味があったのだ。

アルテヌーブのイベントには、トラブルがつきものといっても過言ではなかった。チケットの転売や詐欺事件は毎度おなじみになっていたし、熱狂したファンが問題を起こすこともしばしばだ。それが今回は、より大きな注目を集めるイベントとなったことで激化の模様を見せていた。

ＳＮＳでの誹謗中傷はかなりの数にのぼり、内容もより過激なものとなっていた。攻撃の対象もアルテヌーブにとどまらず、コラボ相手である竹工芸家や、スポンサーとなっている企業、出資者などにも広がり、またその批判に乗っかるメディアも現れて、『イベン

ト開催の闇』などと余計に騒ぎを煽る始末。主催者のもとには「イベントを中止しろ」という半ば脅しのような訴えが多数寄せられ、会場の爆破予告や、関係者に対する殺害予告まで届いているらしい。

誹謗中傷のほとんどは恐らく、アンチとその便乗犯によるものだろう。しかし、単なる悪ふざけやお祭り騒ぎとひと口に片づけてしまうには少々不穏な匂いがした。正義のルポライターの勘というべきだろうか。その陰に危険な悪意がひそんでいるような、無視できない何か――何かが起こりそうな予感というものを、西沢は今回のイベントの周囲に感じていた。

「こんなふうにお父さんと旅行するなんて、ずいぶん久しぶりだよね。っていうか、二人きりっていうのは初めてかも」

一方のカナは、そんな予感は無縁とばかりに無邪気にはしゃいでみせる。そうした娘の姿を見ると、西沢の罪悪感は刺激される。「お母さんも来られればよかったのに」と添えられた言葉が、更にちくりと西沢の胸を突き刺した。

一度は妻子に愛想を尽かされた西沢である。それから時が経ち、様々なことがあって、娘との関係はだいぶ修復されつつあったが、妻とはまだきちんと顔を合わせることができていない。

分断された月日は長く、刻まれた溝は深い。望んだからといって、簡単に元通りになる

ものではなかった。カナとだって二人きりでいると、会話が途切れた瞬間に微妙な沈黙が流れて、どうしていいかわからなくなる時がある。

それでも、カナは自分を誘ってくれたのだから。その幸せを噛みしめるべきだろう。

そう、西沢は考えていたのだが――

自分が大きな勘違いをしていたことを、大分に到着して間もなく西沢は知ることになった。

## 2

「ようこそ大分県へ！」

予約したホテルのある別府の駅で、やけに元気な大声でもって西沢たちを迎えたのは、一人の若い男だった。

中肉というよりはやや細めの体型で、シャツの胸元にはシルバーのペンダントを光らせている。天然なのかパーマをかけているのか少し癖のある髪は金に近い茶色に染められて、左耳には黒い輪っかのピアスがついていた。更にはジーンズの腰の部分にも、銀のチェーンが垂れている。

なんだか、とてもチャラチャラした男である。偏見を承知で言わせてもらえば、ホスト

か遊び人にしか見えない。こんな知り合いは西沢にはいない。人違いと思いたいところだったが、男は妙に愛想のいい笑顔をまっすぐこちらに向けて手を振っている。かと思えば近づいてきて、持っていたカメラを構え、西沢の顔に向かってシャッターを切った。

「『正義のルポライター、大分の地に降り立つ』。いいっすね。バッチリっす」

軽そうな見た目と言動に反し、手にするカメラは意外にもどっしりとして、プロ仕様の立派なものだった。

なんなんだ、この男は。あっけにとられて言葉も出ない西沢に、にっこりと男は笑いかけ、

「はじめまして。東川渉（あずかわわたる）、二十七歳。独身っす。カナちゃんとは日頃から仲良くさせてもらってます」

「仲良く？」

西沢は思わず隣に立つカナに目をやった。仲良くとはどういう意味なのか。詳しく教えてもらいたい。

「アズっちはフリーのカメラマンをしていて、うちにもよく出入りしてるの。彼は大分出身なのよ」

アズっち、という妙に親しげな呼び方が、西沢の心を更にざわつかせる。

「普段は東京のほうで仕事をしてるんすけどね。テクミックスの開催を控えた地元の様子

を撮りたくて、今月に入ってからこっちに戻ってきてるんです」
「そういうことだから、案内役をお願いすることにしたの」
聞いてない。そんな話、西沢はまったく聞いていなかった。
「カナちゃんからよく話は聞いてます」
だというのに東川は、愛想がいい、というよりなれなれしい笑みを浮かべてそんなことを言ってくる。
「西沢さんが書いた記事も読みましたよ。知ってます？　お父さんが書いた記事、カナちゃんきっちりファイリングしてるんすよ」
「ちょっとアズっち。余計なことまで言わなくていいから」
本来なら、自分が書いた記事をカナがファイリングしてくれているという事実を照れつつも喜ぶべきなのだろう。けれど西沢としては、彼らの距離感のほうがどうしても気になってしまう。
こいつはひょっとしてひょっとすると、「そういうこと」なのではないか？
カナが今回の取材旅行に父親を誘ったのは、彼氏を紹介したかったからで――まずは『案内役』として相手を紹介し、親しませた上で、満を持して「お嬢さんをお嫁にください！」とか言ってくるつもりじゃあるまいか。
……いや、ないない。だとしたらこんなチャラチャラした格好はあり得ない。それとも、

肝心のシーンではびしっとスーツを着て現れるつもりだろうか。ギャップで攻める作戦か？

それにしてもまさか、カナがこういうタイプの男を選ぶとは……。

「俺、西沢さんのことリスペクトしてるんで！　今日、こうやって会えて光栄っす」

ふん、と西沢は内心鼻で笑う。そんなゴマをすったところで、「見た目はチャラいけど、案外よさそうな青年じゃないか」なんて思うと思ったら大間違いだ。大体なんだ、リスペットって。

「私はペットにリスなんて飼ったことないぞ。飼うなら犬派だ」

東川は「へ？」という表情をして、それからすぐに声を上げて笑った。

「気が合うっすね。俺も飼うなら犬がいいっす。実家では柴犬飼ってますし。ちなみにリスペットじゃなくて、リスペクトっすよ。リスのクルミくらい好物ってことです」

「アズっち、それも違う」

すかさずカナの突っ込みが入る。「リスペクトは、尊敬してるって意味だから」

「え、じゃあリスは？」

「まったく関係ない」

「マジで？」

東川は目を見張り、大いにショックを受けた様子であった。「高校の頃に俺、先輩から

そう教わったのに」などとぶつぶつ言っている。
本当に、なんなんだこいつは。返す返すもカナがこの男を選んだ理由がわからない。
「まあ、そういうことらしいっすよ」
かと思えば東川はすぐに立ち直り、へらへらとした笑みを見せながら右手を差し出してきた。手首と指にも銀のアクセサリーが輝いている。この男を振ったらチャラチャラと全身が音を立てるに違いない。
「ってわけで、よろしくお願いします。お父さん」
……いいだろう。ならば、受けて立ってやろうじゃないか。
西沢は笑顔をつくり、差し出された相手の手をぎゅうっと強く握ってやった。
「よろしく。だが私は、君のお父さんじゃないけどな」

## 3

そんなわけで、カナとの大分旅行は、西沢の予想とはだいぶ違う様相を呈することになったわけだが――
この日の西沢は、一人で玖珠町（くすまち）を訪れていた。
今朝、カナとケンカをしたからだ。といっても西沢のほうは至って平常通りであったの

で、カナが一方的に怒ってへそを曲げたというのが正しい。

宿泊しているビジネスホテルのロビーで――ちなみに親子とはいえカナとは部屋は別々だ。ちなみのちなみに東川は実家のほうに泊まっている。間違ってもカナと同じ部屋に泊まったりはしていない――今日は別府の市内を回るとカナは宣言した。地元のグルメと竹細工の取材をするからと。

「じゃあ私は、玖珠町のほうへ行ってくる」

西沢は、ごく当たり前のことを言ったつもりだった。なのにカナは、「それってどういうこと？」と顔色を変えた。

娘の仕事を邪魔するつもりはなかったし、それに西沢のほうも、ひょんなきっかけから仕事ができていた。

別府合同新聞で、コラムを書くことになったのだ。

東川が地元の新聞社を紹介してくれたのは、昨日のことだった。故郷で仕事をする際、彼はよく出入りしているのだという。東川を褒めるのは大変に不本意であるが、西沢にとってはありがたかった。フリーのルポライターとして、各地の新聞社や出版社と繋がりをもっておくのは重要なことだ。

そしてそこで、近頃県内でＵＦＯの目撃情報が多く寄せられているという話を聞いた。西沢は興味を持ち、東川の口添えもあって、気づけば県内のＵＦＯについてコラムを書く

話がまとまっていたというわけだ。

既に今朝の新聞には、南沢（みなみさわ）という筆名で『玖珠の町にＵＦＯ襲来？』という見出しの第一回目が載っている。

ＵＦＯは、かねてより西沢が個人的興味を持って追っている対象であった。ゆえにそちらの記事を書く際には、本業と区別をする意味で別の筆名を用いている。

県内のＵＦＯは主に玖珠町で目撃されているということだったので、西沢も行ってみようと思ったのだ。連載一回目の記事は寄せられた情報をまとめたものになったため、二回目は現地をきちんと取材した上で書きたかった。

説明すると、「ああそう」とカナはますます不機嫌をあらわにした。

「ならいいわ。私は今日はアズっちと一緒に市内を回るから。お父さんは一人で玖珠町へ行ってくればいいじゃない」

そしてカナは、「おはようございまっす！」と無駄に元気な挨拶と能天気な笑顔と相変わらずのチャラチャラした装いで現れた東川の腕を取って、さっさとホテルを出ていってしまったのだった。

なぜカナがあんなに怒ったのかわからない。

さっそくどこかでお膳立てをして「お嬢さんをお嫁にください！」とやるつもりでいたのだろうか。だとしたら回避できたのは幸いだ。西沢のほうはまだ心の準備ができてない。

というか、あの男にカナをくれてやる気はさらさらない。

大分県の中西部に位置する玖珠町は、自然豊かな田舎町だ。

数ヵ月前までは静かだったであろうこの町も、ここにきて一気に注目を浴びるようになった。というのも件（くだん）のイベント、テクミックスの開催地に選ばれたからである。

ひょっとして、ＵＦＯとイベントの間には何か関係があるのだろうか。その辺りも調べてみる必要があるだろう。

ＵＦＯが特に多く目撃されているのが、伐株山（きりかぶさん）だった。

美しい台形をした山で、玖珠町にはこうしたメサと呼ばれる形状の山がいくつかあったが、その中でも伐株山はひときわ目を引く特徴的な姿をしている。

車で行くことのできる山頂は、綺麗に整備された芝生の広場になっており、玖珠の町が一望できた。広場の一角には、カフェのような佇まいのしゃれた無料休憩所の建物や、天空のブランコと呼ばれる大きなブランコなどが設置されている。

見上げた秋の空は、青く澄んでいた。昨日はぽつぽつと雨が落ち、夜になると本降りになったが、今日は朝からよく晴れている。

広い空には雲ひとつなく、ＵＦＯどころか鳥の影さえ見当たらない。

情報によるとＵＦＯは夜ではなく、昼間によく目撃されているということだったが、さ

すがに午前中からその姿を望むのは無理だっただろうか。
澄んだ空気は爽やかで気持ちよかったが、風が吹くと少し肌寒く感じられる。西沢は羽織ったコートの前を掻き合わせた。
と、コートのボタンがひとつ取れていることに気がついた。長年着続けた愛用のコートだったが、改めて見るとさすがにかなりくたびれてきている。茶色の色合いも、ずいぶんとくすんでいた。「新しいのを買えばいいのに」とカナには言われるが、その着心地になじみすぎてしまって、なかなかその気も起きないのだ。
カナは今頃、あのチャラい男と別府の街を歩いているのだろうかと、ふと考える。おいしいものを食べながら、取材にかこつけてデートを楽しんでいるのかもしれない。
「いやいやいや」
西沢は頭を振った。やめよう。今は自分の仕事に集中するべきだ。余計なことを考えていると、うっかりＵＦＯを見逃してしまうかもしれない。
気を取り直して上空の観察に戻ろうとした西沢は、少し離れたところに一人佇んで、同じように空を見上げている人物に気がついた。
髪にだいぶ白いものがまじった初老の男だ。何やら思いつめたような表情で、空に視線を向けている。
なんとなく気になって、西沢は男のほうへ近づいていった。愛想のいい笑顔を心がけ―

―カナには胡散臭いなどと失敬なことを言われるのだが――「こんにちは」と声をかけてみる。

突然声をかけられて、男は驚いたふうだったが、すぐに柔和な笑みを浮かべて「こんにちは」と挨拶を返してきた。

年は六十そこそこといったところだろうか。やや目尻の下がった、優しげな顔立ちをしている。服装は地味で取り立てて目立つ要素はなかったが、緑色の石がついたループタイがおしゃれな印象だった。

「空に、何かありますか？」

西沢が訊くと、「え？」と男は不思議そうに問い返してきた。

「ずいぶん熱心に見上げていらっしゃったので」

「ああ、いや」男は照れ臭そうに首の辺りをさすり、

「特に何も。今日はパラグライダーも飛んでいないようですしね」

「パラグライダー？」

「ええ。観光客が体験することもできるようで、なかなか人気みたいですよ」

もしかして、ＵＦＯの正体はそれか？　パラグライダーなんて結末は、あまりにも味気なさすぎる。西沢は肩を落としかけたが、男の続く言葉に弾かれたように顔を上げた。

「それと最近は、ＵＦＯがよく目撃されているとか。今朝の新聞にそんなことが書いてあ

りました」
なんと、相手は西沢のコラムを読んでいた。しかも「実をいうと」と、男は更に驚くべきことを口にする。
「つい先日、私も見たんですよ。それでまあ……もう一度見られないものかと思いまして。来てみたんですが」
「ＵＦＯを見たんですか？　パラグライダーではなく？」
「あれはパラグライダーではありませんでしたね。飛行機や鳥のようにも見えませんでした。いい年して、何を言っているんだと思われるかもしれませんが」
「いえいえ。その話、詳しく聞かせてもらえませんか」
「はい？」男は怪訝そうに小首を傾げる。
「別府合同新聞でＵＦＯのコラムを書いているのは、実はこの私なんです」
そう言って西沢は、懐から取り出した名刺を男に差し出した。

## 4

「西沢紘一さん、ですか。あのコラムの署名は、少し違っていたような……」
「まあいいじゃないですか、細かいことは」

近くにある東屋の椅子に腰を下ろして、西沢たちは話をすることにした。西沢が渡した名刺を、男は興味深げに眺めている。

「ルポライターと書かれていますが。ＵＦＯの取材をしていらっしゃるんですか？」

「私が追い求めるのは真実です。巧妙に隠された秘密を暴き、正義を取り戻すのが私の使命！　真実の裏の向こう側へ。正義のルポライター・西沢紘一とは私のことですよ！」

西沢が力強く決めてみせると、男はびっくりしたように目をしばたたいた。初対面の相手に、いささか決めすぎたかもしれない。西沢はこほんとひとつ咳払いをする。

「というわけでまあ、ＵＦＯもその延長にあるわけです」

「……なるほど」

頷いた男は納得したというよりも、西沢の勢いに押されたのかもしれない。半ば放心したように、男の指先はループタイの緑色の石をなぞっていた。

「素敵なループタイですね。翡翠（ひすい）ですか？」

西沢に問われ、初めて自分の指がそれをいじっていることに気づいたようだ。胸元に目を落とし、男は「ええ」と答える。

「妻からのプレゼントです。翡翠は彼女が好きな石でしてね。といっても、もう古い話です。妻が病で旅立って、二十年以上経ちますから」

「……それは失礼しました」

いえいえ、と男は穏やかな笑顔で手を振り、
「ここは妻が生きていた頃に、家族でよく訪れていた場所なんですよ」
「そうですか」家族の話題は早々に切り上げて、そろそろ本題に入ろうと西沢は思ったのだが、男は言葉を続けた。
「この玖珠町も、このところずいぶんと賑やかになりましたよね。近頃よくテレビに映るので、驚いています」
「テクミックスというイベントが開催されるんですよ。東京でも、いまや玖珠町の名前はすっかり有名になりました」
「そのようですね。平田晒子も報じてました。西沢さんは東京の方ですか？　なら、彼女のことはご存じないかもしれませんね。こっちでは有名なリポーターなのですが」
『フレッシュな耳より情報を真空パックで産地直送！』ってやつでしょう？　地元からの中継という形で、東京のテレビにも彼女の姿は映ってますよ」
「そうでしたか」
正直、西沢は平田晒子というリポーターにあまりいい印象は抱いていない。テクミックスの関係者に突撃インタビューなどをしていたが、相手の都合や反応もお構いなしにぐいぐい迫り、自分に都合のよい形にまとめる強引さは、見ていてあまり心地いいものではなかった。それを言うとカナは「同族嫌悪ってやつじゃない？」などと返してきて、西沢の

胸に苦いものを滲ませた。

自分はいつだって信念をもって仕事に取り組んできたと西沢は思っているが、かつての自身の姿は傍目には平田晒子と変わりなく映っていたかもしれない。半ば冗談めかして言ったカナには恐らく、他意はなかったのだろうけれど。

「しかし色々と物騒な話も出てますよね。会場の爆破予告や関係者の殺害予告まで届いているとか、週刊誌に書いてありましたけど」

大丈夫なんでしょうか、とループタイをいじりながら男は表情を曇らせる。

「世間の注目が大きくなれば、それに乗じて騒ぎたい輩も出てくるものですからね。もっとも、それにメディアまでが乗っかるのはどうかと思いますが」

西沢もまた不穏な匂いを感じ取ってはいたが、ここで口にして無駄に相手を不安がらせることもない。「まあ大丈夫ですよ」と明るく言った。

「充分な対策をとった上で準備作業も進められているようですから。すべて順調、みたいなことを出資者の彼もＳＮＳで呟いてましたし」

「出資者の彼というと？」

「今回のイベントに個人でかなりの資金提供をしている人物がいるんですよ」

「それは、資産家の……」

「ああ、そうですね。資産家といってもいいでしょう。彼はかなりまめにＳＮＳをやって

いて、色々と呟いてくれるんです」
「ですがその人物は今、行方不明になっているのでは？」
え、と西沢は男の顔を見た。男のほうもまた戸惑ったふうな表情をしている。
「行方不明って、どういうことです？」
荒金伴彦（あらがねともひこ）が行方不明になっているなどという話は、西沢の耳には入っていない。コートのポケットからスマートフォンを取り出すと、西沢はさっそく彼のＳＮＳを確認してみた。荒金はいつもと変わりなく、今朝も自分の予定を呟いている。
まあそうだろう。彼が行方不明になったとなれば、それこそ大騒ぎだ。
スマホを元通りポケットにしまい、西沢は相手に向き直る。
「どうも勘違いをさせてしまったようですね。私が言った出資者というのは、荒金伴彦という人物のことだったのですが」
「え……」
男はぱちぱちと瞬きをして、それから「ああそうか」とはにかむように頭を掻いた。
「大きなイベントのようですし、出資者も何人もいますよね。すみません。つい先日、こっちのニュースで報じられていたので、その人物のことかと思ってしまいました」
「今回のイベントに出資して、行方不明になっている人物がいるんですか？」
「二週間ほど前から行方不明になっている資産家がいるそうです。その資産家も、イベン

トに出資していたという話だったので……」
「二週間も前から？　東京のほうではそんな事件は報じられていませんでしたが」
「事件かどうかわからないからでしょう。二千万円の現金を所持したまま行方をくらませたという話ですので。あの報じられ方だと、自分の意志で行方をくらませた可能性が高いと考えられているのかもしれません」
「なるほど」
本人の意志による家出だとすれば、へたに騒いでしまうと逆に帰って来づらくなるということはあるかもしれない。
それにしても、すっかり話題が逸れてしまった。いい加減、本題に入らなければならない。口を開きかけた西沢だったが、またも「あっ」という相手の声に遮られる。
「ずいぶん話し込んでしまいました。私はそろそろ行かなければ」
腕時計に目をやり、男は椅子から腰を上げた。
「え？　ちょっと待ってください」
肝心のＵＦＯのことは何ひとつ聞けていない。
「コラム、楽しみにしています。ＵＦＯの正体がわかったら、ぜひ教えてくださいね」
にっこり笑って会釈をすると、男はそのまま去っていってしまった。
「いや、ちょっと――」

せめて、彼が目にしたＵＦＯがどんなものだったのかだけでも知りたい。腰を上げ、相手を引き留めようとした西沢のコートのポケットで、スマホが振動を発した。

誰だ、こんな時に。つかみ出して確認すると、知らない番号からの着信だった。

「……はい。もしもし？」訝りつつ、西沢は電話に出る。

〈あー、西沢さん。俺っす〉

東川だった。よりにもよってお前か。即座に通話を終了したい衝動に駆られる。

「どうして私の番号を知っているんだ」

〈カナちゃんに聞いたんすよ。これ、俺のケータイ番号なんで。登録しといてくださいね〉

なんでお前の番号を登録しなきゃならないんだ、と言いたいのを西沢はぐっとこらえた。

「カナはどうした？」

〈えーと、今はちょっと……取り込み中っす〉

「取り込み中ってなんだ」

〈取り込み中は取り込み中っすよ。それより、お父さんのほうはどうっすか。ＵＦＯ、見られました？〉

「お父さんじゃない。そしてそう簡単にＵＦＯが見られたら苦労しない」

〈ま、そうっすね。でも伐株山、なかなかいいところでしょ〉

「用がないなら切るぞ。こっちも忙しいんだ」
〈西沢さん、せっかちっすね。ま、こっちもあんまり長話できる状況じゃないんで、ずばり訊きますけど。緑と青のふたつのスイッチが目の前にあったとしたら、西沢さんならどっち押します？〉
「は？」どういう状況だ？
〈やっぱ緑っすよね？　緑でしょ？〉
「そんな意味のわからないスイッチ、私は押さない」
〈まあ、押さなくても西沢さんの運命は既に決まっちゃってるんですけどね〉
「勝手に人の運命を決めないでくれないか」
〈仕方ないでしょ。そもそも西沢さんが……って、すいません。時間切れっす〉
「時間切れ？　君は一体、何をやってるんだ」
〈この電話、カナちゃんにはナイショってことでお願いします。お互いの平和のためにも〉
じゃ、と言って東川は一方的に通話を切った。
「……なんなんだ」
まったくもってわけがわからない。しかも今のわけのわからない電話のせいで、貴重なＵＦＯの目撃者であった男の姿はもうどこにも見えなくなっていた。

こんなことならあんな電話など無視するのだった。ため息とともに落とした視線の先で、きらりと何かが光る。

足元に何か落ちている。拾い上げて確認してみると、耳飾りの片方だった。

緑色の珠の上に、銀の細工の鳥が乗っているデザインのピアスだ。

「緑……」

緑と青、どっちのスイッチを押すか？　今しがたの東川との会話が耳によみがえる。偶然だろうが、妙なタイミングだ。

顔を近づけて、西沢はしげしげと小さな耳飾りを観察する。先の男のループタイの石と色味がよく似ているように思えた。この珠も翡翠だろうか。もしやあの男の落としものか？　彼はもちろん耳飾りなどつけていなかったが、翡翠は妻が好きな石だと話していた。亡き妻の形見というのはあり得る。だとすれば、彼にとって大切なものだろう。

しかし、返そうにも相手の姿はもうどこにもない。

「やっぱり、電話になんて出るんじゃなかった」

後悔したところで、どうにもならない。

と――視界の端、晴れた空の中に、小さな青い輝きがちらついた。

「ん？」西沢は空を仰ぎ見る。

青く光る小さな物体が、空に静止して浮いていた。

パラグライダーや飛行機では、明らかにない。
もしやＵＦＯ？　写真を撮ろうと、西沢は慌てて持参していたデジタルカメラを取り出す。
けれど空に向けてカメラを構えた時にはもう、青く輝く小さな物体は、青空に溶けるようにして姿を消してしまっていた。

## 5

幸運にもＵＦＯらしきものを目撃できたというのに、撮影することはかなわなかった。悔しさを胸に伐株山を後にした西沢は、テクミックスの開催の場となる旧・豊後森機関庫へ向かった。
せっかく玖珠町を訪れたのだからイベント会場を見ておきたかったというのもあるが、もしかすると山頂で会ったあの男も立ち寄っているかもしれないと考えたからだ。
会場では、スタッフたちによる準備作業が進められていた。関係者以外の立ち入りは禁じられているため、部外者は遠巻きにその作業を眺めることしかできない。
テクミックスは昼と夜の二部構成になっており、昼の部では竹細工の展示・即売会と、特設ステージのほうでは地元アイドルのライブが予定され、夜の部ではアルテヌーブのデ

ジタル技術と有名な竹工芸家である阿南創一郎（あなんそういちろう）の作品をコラボさせた、特別なパフォーマンスがおこなわれることになっている。このパフォーマンスが特に今回のイベントの目玉とされ、詳細は明らかにされていないものの、かなり斬新なアートパフォーマンスであるようだと世間の注目と期待を集めていた。

付近には西沢と同じように作業を眺めている人の姿がちらほらと見受けられたが、あの男の姿は見当たらなかった。

それにしても、辺りがなんとなく騒然としているように見える。立ち働くスタッフたちも、どこか浮き足立っているようだ。

何かあったのだろうか。不審に思い、西沢が様子を窺っていると、

「なんか、火事があったらしいね」

答えが背中に投げかけられた。振り返ると、いかにも話し好きそうな老人が立っていた。

「火事？」

「機械が燃えたんだってさ。すぐに火は消し止められたみたいだけど」

「じゃあ、小火（ぼや）ですんだんですね。機材がショートでもしたんでしょうか」

「さあ。誰かが機械を壊したとか、怪しい人影を見たとか言ってるスタッフもいるようだけど。物騒だよねえ」

物騒と言いながら、老人は何やら楽しそうだ。イベント会場で起こるハプニングも、彼

にとってはちょっとしたお祭り騒ぎにすぎないのかもしれない。
それにしても、小火騒ぎが何者かの手によって故意に引き起こされたものだったとしたら、本当に物騒である。会場の爆破予告なども、いよいよただのいたずらと片付けるわけにはいかなくなるのではないか。
「いやだよねえ。最近、妙な事件が多いだろ？　朝早くに住宅街で男が射殺されたとか、資産家が数千万円の現金を持って行方不明になったとか。まったく不穏だよ」
いやだとか不穏だとか言いながら、やっぱり老人は何やら楽しそうだった。一番物騒なのは、案外この老人なのかもしれない。
適当に話を切り上げて老人と別れ、西沢はそうっと会場のほうへ近づいてみる。もう少し詳しい様子を知りたかった。
「おや、あれは……」
眼鏡をかけた若い女性と話している、スーツ姿の二人組が目に入った。女性のほうは恐らくスタッフだろうが、二人組は明らかに他のスタッフたちからは浮いていた。特定の人種が持つ、独特の空気を身にまとっている。
「ケンくんとセンパイさんじゃないですか」
西沢は彼らを見知っていた。警視庁の刑事コンビ、開明寺ケンと『センパイ』である。もちろんセンパイのほうにもちゃんとした名前はあるが、ケンがあまりにも「センパイ、

センパイ」と呼ぶため、もはやニックネームと化しているふしがある。

これまで、事件を追う中で彼らとは幾度か顔を合わせてきた。ともに事件を解決した仲間、もしくはマブダチだと、少なくとも西沢は思っている。

まさか、彼らまで大分に来ていたとは。つくづく縁があるものだ。だがそうなると、いよいよ物騒で不穏なものを感じざるを得ない。警視庁に所属する彼らがわざわざ大分へ来るからには、相応の理由があるのだろうから。

先の小火騒ぎもやはり、ただの機材のトラブルではないのかもしれない。

ケンたちと話していた眼鏡の女性の視線が、つと西沢のほうに向けられた。西沢は慌ててその場を離れる。いつの間にか、うっかり立ち入り禁止のエリア内に入ってしまっていたらしい。

ケンたちとの再会は、もう少し先の楽しみにとっておこう。感動の再会シーンには、それにふさわしい『材料』と演出が必要だ。

## 6

その夜。西沢は、東川と二人で夕食をとることになった。

東川が話すところによると、カナは昼間、別府の街を取材して回る中で竹細工のアクセ

サリーをつくる若い女性デザイナーと知り合い、すっかり意気投合して、今夜は彼女のクリエイター仲間たちとの食事会に招かれたそうだ。
「君は一緒に行かなかったのか」
「俺も行ったら西沢さん、ぼっちで飯を食うことになるじゃないっすか」
自分に気を遣ってくれたわけか。いや、それも作戦の内で、二人で食事をすることで『お父さん』との親交を深めようという腹積もりかもしれない。油断は禁物だ。
カナがいればおしゃれなレストランなどへ行きたがったかもしれないが、男二人ならその必要もない。東川がおすすめだという居酒屋へ向かった。
「でも西沢さん、さすがっすね」
とり天をつまみにビールを飲みながら、東川が言う。
テーブルの上には、「これうまいっすよ」と言いながら東川が勝手に頼んだ料理たちが並んでいた。こっちの意見も少しは聞け、と西沢は言いたかったが、彼の選んだ料理は確かにどれも皆うまかったため、結局はおとなしく箸を伸ばすに至っている。
「初めて現場へ行って、いきなりＵＦＯを目撃するなんて。やっぱ西沢さん、持ってるっすよ」
西沢から本日の取材の成果を聞き出すと、東川はさっそくこちらを持ち上げてきた。口にした麦焼酎のうまさも手伝い、うっかりいい気分になってしまいそうだったが、「そう

簡単に流されてなるものか！」と西沢は心の内でぐっと踏ん張る。
「でも、写真に撮れなかったのは惜しかったっすね。俺がいればバッチリ収めてみせたんですけど」
「無理だろう。見えたのは本当に一瞬だったし」
「そうっすかねー。俺、こう見えてわりと霊感あるんすよ」
ＵＦＯを写真に収めることと霊感は、果たして関係あるのだろうか。
「ところで、君がかけてきた電話はなんだったんだ？　緑と青のスイッチがどうとか」
あの電話は不可解すぎた。カナにはナイショということだったが、今はカナがいないので西沢は訊いてみる。
「ああ、あれについては忘れてくれていいっす。もう決定したことなのについ不安になって、訊いてみただけですから」
「決定したって、何を」
「まあまあ。そのうちわかることっすよ」
東川は通りかかった店員にビールのおかわりを頼み、「それより」と話題を変える。
「イベント会場での小火騒ぎってのは、なんか嫌な感じっすね。警視庁の刑事がこっちに来てるってのも」
「彼らがいるなら少しは安心、ともいえるかもしれないが」

「西沢さんは、その刑事たちのことを信頼してるんすね」
意外だと東川は言いたげだった。西沢とて国家権力はあまり好まないが、彼ら個人に関しては、それなりに高く評価している。
「ま、何事もなく開催してくれればいいんすけどね。地元もこれだけ盛り上がってるんですから。無事成功してもらいたいです」
話しながら、東川の左手が左の耳についたピアスをいじる。それを見て西沢は、コートのポケットに入れっぱなしになっていた耳飾りのことを思い出した。
「そうだ。こいつをすっかり忘れてた」
西沢がポケットから取り出した耳飾りを見た途端、東川はさっと顔色を変えた。
「西沢さん、それ……」

「伐株山で拾ったんだ。あそこで話した男性が落としたものかもしれない」
「ちょっと、いいっすか？」
西沢から耳飾りを受け取ると、東川はしばらくそれをじっと見つめた後に、こちらに顔を向け、
「これ、片方だけですか？」
「ああ。落ちていたのは片方だけだった」
そうっすか、と東川は頷き、再び耳飾りに視線を戻す。「なんで」と彼の唇が小さく動いたのを、西沢は見逃さなかった。
「東川くん、それに見覚えが？」
「え？　あ、いや……。これ、結構いい細工ものっすよ。翡翠の珠と銀のカワセミ。デザインとしてもシャレがきいてますし」
「その鳥は、カワセミなのか」
カワセミは漢字で『川蝉』と書くが、『翡翠』と書くこともある。翡翠の珠に乗る翡翠（かわせみ）。確かにシャレがきいている。
「西沢さん。これ、俺が預からせてもらってもいいっすか？」
「やっぱり君、持ち主に心当たりがあるんだな」
見つけたタイミングから、あの男が落としたものと西沢は考えていたが、そうではない

のかもしれない。女性向けのデザインだし、普通に考えれば落とし主は女性だろう。
「え？　いや、でもほら、特徴的なデザインなんで」
特徴的なデザインだからなんなんだ。心当たりがあるということじゃないのか？　どうにも東川の答えは歯切れが悪く、的を射ない。
しばらく待ってみたが、東川はそれ以上、説明する気はないようだ。何やら思いつめたふうにも見える相手の表情に、仕方ないと西沢は息をつく。
「じゃあ、それは君に預けることにしよう」
どのみち西沢が持っていても、持ち主に返せるかどうかはわからない。再び伐株山へ赴いたところであの男にまた会えるとも限らないし、そもそもあの男が落とし主かどうかもわからないのだから。
「ありがとうございます」
礼を言うと、東川は耳飾りを大切そうにハンカチに包み、ポケットにしまった。それから「あ、お父さん」と声を上げる。
「グラスが空になってるじゃないっすか！　もう一杯いきます？　今度はちょっとお高めのやつ、いっちゃいましょうか」
すいまっせーん、と東川はテンション高く店員を呼ぶ。そしてやっぱり西沢の意見は聞かないまま、少々値が張る酒を注文した。やれやれ。その金は一体、誰が払うというのだ

ろうか。
　東川の妙なハイテンションは、帰る段になるまで続いた。けれどそれは無理をして明るくふるまっているように、西沢には感じられた。

## 7

翌日。西沢たちが宿泊しているホテルに、東川は姿を見せなかった。

（続く……）

続きは本編をお楽しみ下さい。

本編はハッピーミールグッズストアにて配信中！

風森 章羽（かざもり しょう）プロフィール

2013 年、「渦巻く回廊の鎮魂曲 霊媒探偵アーネスト」で第 49 回メフィスト賞を受賞。2014 年、同作が講談社ノベルスより刊行され小説家デビュー。代表作は『霊媒探偵アーネスト』シリーズ。最新作は『獏の掃除屋』（2023 年 2 月 講談社より発売）

大分･別府ミステリー案内 歪んだ竹灯篭スピンオフ作品

# 導（みちび）きの翡翠（ひすい）　お試し読み版

書き下ろし作品

大分･別府ミステリー案内 歪んだ竹灯篭のスピンオフ作品です。

この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。

2023 年 2 月 22 日発行　著　者　風森 章羽

発行者　関純治　発行所　ハッピーミール株式会社　https://bonusstage.net/

本書の内容あるいはデータを全部一部にかかわらず、無断で複製公衆送信(インターネット上への掲載を含む)することは法律で禁じられています。また個人的な目的とする複製であってもコピーガード等の著作権保護施策を解除できません。

(C)Shou Kazamori (C)Happymeal Inc.

大分・別府ミステリー案内

# 歪んだ竹灯篭

© Shou Kazamori © Happymeal Inc.

Happymeal Novels

西沢紘一の事件簿